

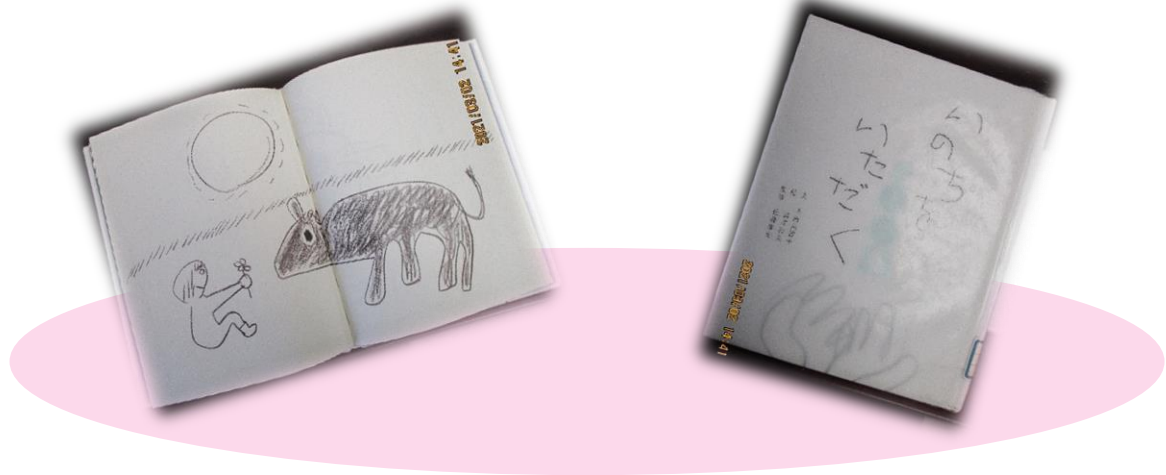
校長室から (NO. 47)

いのちをいただく

今年は丑(牛)年です。その年には、干支にちなんで、牛の歩みのように、ゆっくりでもよいから、後ずさりすることなく、一步一步着実に進んでいくことをよしとする話をよく耳にします。

また、牛は、家畜として人間と重労働を分かち合ってきました。あるいは、食肉としてはもちろん、牛乳や皮、体の全てを私たち人間に提供してくれています。なんて「牛」って、神が与えたもうた優れた生き物なんだろうと、感謝しつつも、どこか当然のような感覚をもって受け止めていました。

ところが、先日「いのちをいただく」(文：内田美智子)という絵本に出会いました。(本校の図書室の書籍)



牛を殺して、お肉にする仕事をしている坂本さんと、息子のしのぶ君、そして女の子とかわいがっていた牛のみいちゃんのお話です。粗筋は割愛しますが、児童向けのこの絵本に涙が溢れ、殺されていく動物、殺さざるを得ない人間の心の葛藤、また、そんなことを忘れてお肉をいただいている自分、それぞれに心が痛みました。いのちをいただくとは、決してきれいごとではないということを思い出させてもらいました。たやすく「感謝してます」と言うのも、申し訳ない気がしました。

巻末には、作者がこのように記していました。

「私たちは、食べ物を食べて生きている。生きることは食べること。すべての食べ物は命だ。肉も魚も野菜も米も、すべてが種を残そうとする生命体だ。人が生きるということは、命をいただくということ。殺すこと。和たちの命は、多くの命に支えられている。それを実感したときに、食べ物のありがたみが分かる。食べ物を粗末にしてはならないのだ。」

